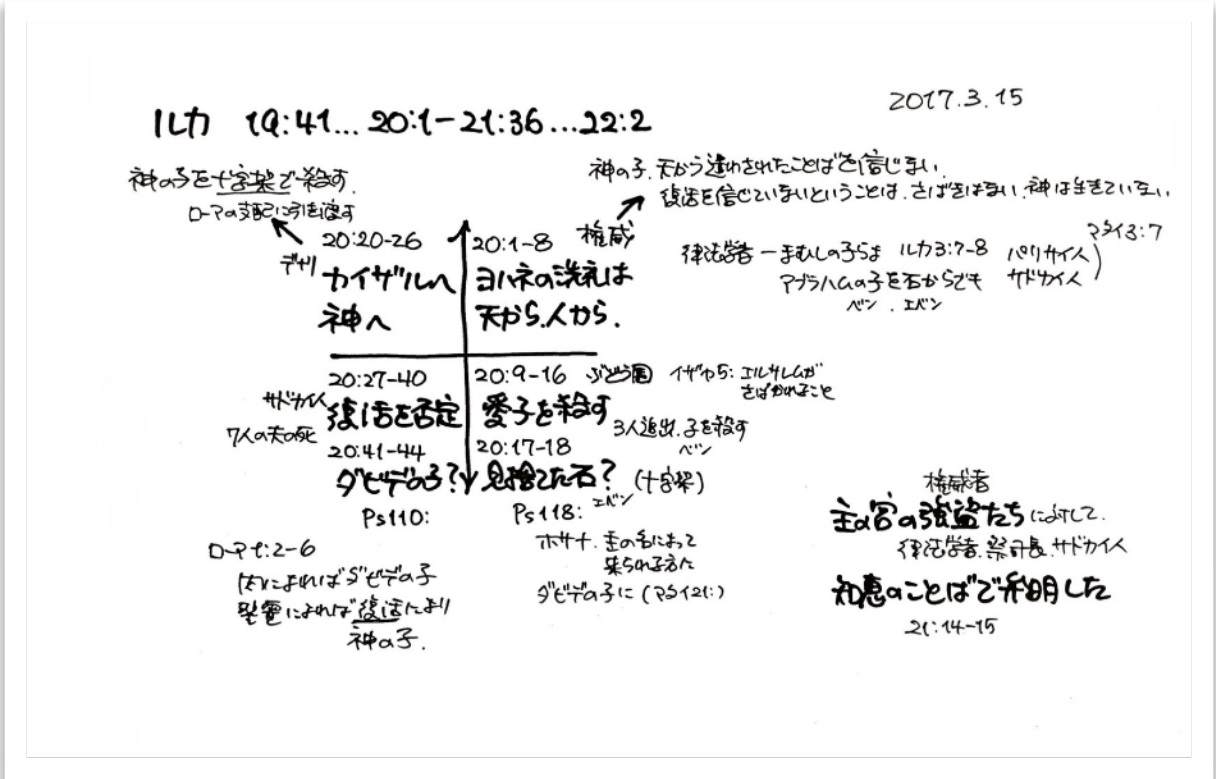
ルカ福音書19:41-22:2



ルカ福音書の20章、21章です。19章の41節からなのか、45節からなのか、20章の1節からなのか、この辺がちょっとまだはっきりしていません。それと終わりが21章の36節までなのか、22章の2節までなのか、この辺がちょっとはっきりしていません。

全体としては、はっきりしていませんと言っているところにあるように、神殿エルサレムに来ました。いよいよ都に来ました。そして、宮に入ります。その宮は祭司長、律法学者たちが支配していますけど、そこでキリストが殺そうとされている。民衆がそこにいるのですね。最初、律法学者たちは殺したいのだけど、「民衆の手前できません、できません」みたいなことが、何度か出てきます。その話の最後に(21:37~)、宮で教えて民衆が皆教えを聞いてました。最初律法学者たちは殺そうとしたけれども、民衆を恐れていたのでできませんでした。これは過ぎ越しの祭りが始まりますと言ってるところなので、この後の所の出だしかもしれないし、囲ってる所かもしれないので、ここがどうかなということがわかりませんが、全体としては、宮がエルサレムの神殿、都が堕落して腐敗しているということを表している段落になります。

20章1節から44節までのところは、その支配者の堕落、主の宮の強盗たちはどういう者たちなのかということを表している。その宮の強盗たちが建てた神殿、この金ぴかのものは裁かれますというのが21章の方ということだと思っています。

20章の方は、4つの段落に分かれているだろうということで分析したのがこちらです。(20:1~8)最初にヨハネのバプテスマは天からなのか、人からなのかということを最初律法学者たちが引っ掛けようとして言ってくるという話ですね。(20:9~16)その後にぶどう園の主人が3人送ったけれども、3人袋叩きにされて、愛する子を遣わしたけれど殺

される。(20:17~18)その後に、旧約の引用の箇所があって話が終わります。(20:20~26)次に今度はイエスを総督ローマの支配と権威とに引き渡そうとして引っかける問いをする。罠にかけようとするということでデナリ銀貨、「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」という話があって、(20:27~40)その後にそれじゃあと言って、この律法学者たちと争っている方のサドカイ人がどれどれということで出てくる。この復活はないと言っていたサドカイ人たちがイエスに難問を持ってくるというような感じですね。「7人の兄弟がいたけど、みんな死んだ場合にその妻はどうなるんだ」みたいな質問をします。それに対して「神は死んだ者の神じゃなくて、生きてる者の神だ」という答えをします。そうすると皆黙るんだね。(20:41~44)黙った後に「じゃあキリストはどうしてダビデの子なんですか、ダビデは主と呼んでいるのに、どうしてキリストはダビデの子なのですか」ということで話が終わります。

ということで形として、(20:1~8)ヨハネの洗礼は天からなのか、人からなのか。(20:9~16)ぶどう園の愛する子を殺す。(20:17~18)見捨てられた石の引用があります。(20:20~26)カイザルのものはカイザルに。(20:27~40)復活するのを否定する話があって、(20:41~44)じゃあ、ダビデの子とはどういうことですかというように、形が似ているのでしょうということです。

それぞれにこの表にコメントがありますね。たとえば見捨てた石ですね。家づくりの者らの捨てた石の話は、118篇からの引用です。ダビデの子の方は110篇からの引用です。118篇からの引用の方を見ると、これは118篇の中に、その前にあります「ホサナ。主の名によって来られる方に」という言い方が、これはエルサレムに入城するところですね。その詩篇からの引用なんです。マタイ21章の方を見ると「ダビデの子にホサナ」という言い方をしています。捨てた石の話は、愛する子を殺したということについての説明なんだよね。こういうことがあってはいけませんというふうに、人々に言ったことに対して、じゃあこれは何ですかという問いになっています。

「ダビデの子は」「メサイアは」という話は、単独の話ではなくて同じ形で、復活はないと言っている話の後に、もう1つ話として加わっているので、復活はないと言っている人たちに対しての訴えの引用ということであろうと。その前提で見ると、このような箇所があります。ローマ1章2節から6節のところにこのようにありますね。ローマの1章の出だし、福音とはこれですと言ってるところです。「福音は預言者たちを通して約束されたものです。御子に関することです。」のところですね。「御子は肉によればダビデの子孫として生まれ、聖い御霊によれば死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主キリストです。」と言っていることです。これがこの秘密を解き明かしてることだと思います。肉によればダビデの子。御霊によって復活したので、神の子なんだということが表されました。そのメサイアですという風に言ってますので、聖い御霊によれば、復活による神の子、ダビデの子、神の子と。ここ(20:14~)に引用されただけで、復活の話をしてるというふうにピンと来なければいけないんだろうと思うのですけど、なかなか我々はピンと来ませんが、もちろんパウロは分かっているでしょう。この復活のことをただ死に対して復活しているということではなくて、もっと広い深い意味がサドカイ人たちもわかっている。だから論争になってるということだと思います。この復活はないと言っている人達は、この論争から考えると、さばきはないんだと。神様は生きているさばき主ではないのだということをサドカイ人達は考えている。神様を信じていない。神の子がこの世をさばくとは信じていないということに対しての応答ということだと思います。死ぬ話の所に、人の子なのか、復活に預かるので神の子なのだというなこともそうです。それは、その反対側にあ

ります(20:1~8)ヨハネの洗礼の話と並行して考えると良いのではないかということを、この段落構成で言われてるんだと思いますね。

バプテスマのヨハネは、天から、人からと言ってるんですけども、この律法学者、祭司長たちは、ヨハネは天からだと信じていないということがここ(20:1~8)に書いてあります。天からだといえば、なぜ信じなかったのかと言われてしまいますと。信じてないのです。神のことばを語ったと信じてない。そのマムシの末たち。マムシの末たちは形だけ、洗礼を受けた。マタイの3章の方では「パリサイ人、サドカイ人たちが集まってきて」という風に書いてあります。「アブラハムの子を石ころからでも産むことができるのに」というのが話として繋がっています。子と石はヘブライ語ではベンとエベンで掛け言葉みたいになっているのかもしれません。この権威の話しをした時に、神の子であること。(20:27~40)(20:41~44)メサイア、イエス様がダビデの子、神の子であると天から遣わされた言葉であるということを信じてない。復活を信じていないということは、さばきはない、神様に生きていない、神様を信じていないというのが、この2つのところですね。この腐ってる強盗の巣になってる宮のリーダー達は、キリストを信じていない。こちらは信じていない方です。信じていないので殺そうとしている。そこに権威ある教えを持っている人が来るとまずいんですね。それで殺そうとする。殺そうとするけどうまい方法がなかった。

(20:20~26)それでスパイを送って、そうだローマの権威に逆らわせれば十字架にかけられて殺されるはずだということで、このカイザルの問いがありますね。イエスを総督の支配と権威とに引き渡すためにということです。そうすれば殺せます。神の子を十字架で殺そうとする。ローマに引き渡す。(20:9~16)このぶどう園の話の方は、この愛する子ですね。バプテスマ、天からのバプテスマを受けて天から私の愛する子と言われたその子を殺す。十字架につける。十字架につけられるけれども復活して、それは主の名によって来られる方なのだというこの118篇がここにあります。この神の子であることを信じない者(20:1~8)(20:27~40、20:41~44)は、神の子を殺す(20:20~26)(20:9~16、20:17~18)というのが、こちら側の並行しているところかなというふうに思います。

ですから、ここの段落全体は、主の宮の強盗たち、律法学者、祭司長、サドカイ人たちが、知恵の言葉に対して、知恵のことばでイエス様が弁明する、答えるというのがこの段落なんですけど、それは次のところですね。

21章のエルサレムがさばかれて、地震、飢饉、疫病が来る時に、「私の名のゆえに王や総督の前に引いていかれる。」(20:20~では)「王や総督の前に引き渡される」。それは「証をする機会になります。どう弁明しようか考えなくても大丈夫です。その時には御霊がことばを与えてくれるから」ということですけども、「反対者の誰も否定できないようなことばと知恵を私が授けるから」ということで、まずイエス様がその模範となられる。誰も答えられないんだよね。この「何の権威にも答えられません。答えられません、答えられません」ということをイエス様が実際に模範として前もってやってくださっているという段落が、この20章の全体の意味かなというように考えています。